

武庫川女子大学の 建築教育

武庫川女子大学建築学部長
大学院建築学研究科長 教授

岡崎 甚幸

工学博士。広島大学教育学部附属福山高等学校卒業、京都大学工学部建築学科卒業後、ワシントン大学建築学部大学院建築都市デザインコース修了。京都大学助手、福井大学助教授、同教授、京都大学教授を経て、京都大学名誉教授。専門は建築設計、建築設計計画学等。日本建築学会賞受賞。多くの賞を受賞した「サンドーム福井」等、建築設計作品を多数手がける。「群集歩行のシミュレーションモデル」「居住空間構成法」などの研究論文も多数発表。京都の都市景観の再生特別調査委員会委員長ほか。

■甲子園会館と建築スタジオと庭園
武庫川女子大学の上甲子園キャンパス(写真1)に2006年4月、生活環境学部建築学科と大学院生活環境学研究科建築学専攻が開設された。女子大初の建築学科・専攻である。校舎は「甲子園会館」と「建築スタジオ」。

「甲子園会館」(写真2)は、フランク・ロイド・ライトの愛弟子である遠藤新の設計で、1930年に「甲子園ホテル」として建てられた名建築である。当時は「東の帝国ホテル、西の甲子園ホテル」と並び称された。支配人林愛作と遠藤は、最初に予定されていた敷地を嫌い、松林が美しい現在の場所を選んだ。ここは当時、今は廃川となった枝川が武庫川から分岐して、甲子園球場の横を通り、海に流れだす景勝の地であった。その後、ホテルから海軍病院や米軍将校宿舎に転用される数奇な運命を経て、1965年に本学の「甲子園会館」となった。現在は国登録有形文化財。装飾タイルやボーダータイル、日華石や石膏のレリーフ、シャンデリア等で彩られた建築空間は、まさに総合芸術である。



写真1 上甲子園キャンパス全景



写真2 甲子園会館



写真3 建築スタジオ

「建築スタジオ」(写真3)は、先端技術を取り入れつつ「甲子園会館」との調和を図った現代建築で、開設直後の2007年に誕生した。

「甲子園会館」と「建築スタジオ」という新旧の建築空間を、自然豊かな池泉回遊式の庭園がつないでいる。その一部は、四畳半の茶室の露地でもある。ホテル時代の松林をはじめ、桜や楠、竹林を活かしながら、建築と自然が共生するキャンパスが実現されており、風致地区にも指定されている。キャンパス全てが学生たちの絶好の教科書である。

■演習中心の少人数制スタジオ教育

1学年の定員は40名。パソコンと平行定規が付いた専用の製図机を一人一台ずつ用意した。さらに各スタジオには模型制作や集団討論、プリントアウトのための共同机がある。欧米の大学と同等(もしくはそれ以上)のスタジオ型教育を行っている。

「甲子園会館」では、ホテル時代の食堂が1年生のスタジオである(写真4)。「建築スタジオ」には2年生から修士2年生までの学



写真4 甲子園会館 1年生のスタジオ



写真5 建築スタジオ 2年生のスタジオ



写真6 教員との一対一の対話

年毎のスタジオが計5つある(写真5)。全学年ともに午前は「甲子園会館」で講義を受け、午後は各スタジオ等で演習を行う。

設計演習は定員40名のスタジオで教員3名が担当し、教員が各学生の製図机をまわって一対一のきめ細かい指導を行っている(写真6)。つまり教員1名あたり学生約13名という、少人数制で対話型の演習を実践している。

2年生になると「建築スタジオ」に移り、同じスタジオで修士2年生まで演習の時間を過ごす。「遊牧民」のように大学の教室間を移動するのではなく、ここでは徹底した「定住民」となり、スタジオで建築設計に打ち込む。次の利用者のために、机を片付けて移動する必要はない。家族の誰よりも長く、友人たちと一緒に暮らす。

カリキュラムは演習中心で、大学院を含む6年一貫型。大学院においてもスタジオで演習を行う。演習は全授業時間の半分以上を占める。設計演習の課題数は、基本的に1年間で6課題。課題の提出毎に、講評室にて全員の作品の講評を、学外の建築家を複数招いて



写真7 講評会



写真8 建築スタジオの廊下は展示スペースとなっている



写真9 木造建築の現場のフィールドワーク

2日間に渡って行う(写真7)。講評会後は、廊下の展示スペースに全員の作品を展示(写真8)。これを1学年あたり年6回繰り返す。

4年生の卒業研究では、卒業設計と卒業論文の両方を提出し、設計だけではなく論理的な力も養う。修士2年では、修士設計か修士論文を選択する。

本学の教育は、2011年度より学士修士課程6年間(建築系学士修士課程建築設計・計画系分野)のJABEE認定により、UNESCO-UAI建築教育憲章対応プログラムとして認められている。

■土曜日はフィールドワーク

講義や演習で得た知識や技術を、具体的に理解することを目的として、土曜日にはフィールドワークを実施している。例えば木造建築の設計演習の進捗に応じて、木造建築の現場を見学させていただく(写真9)、美術館の設計演習に関連して、美術館のバックヤードを見学させていただく、日本建築史の講義に関連して京都をはじめ近畿一円の社寺



写真10 銀閣寺のフィールドワーク



写真11 フィールドワーク出発前のバス

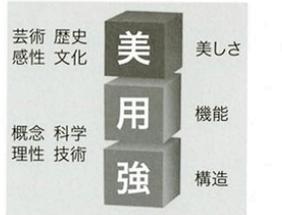


図1 「強・用・美」の関係

等を見に行く(写真10)。その時その時の授業にあわせて、担当教員が工夫をしながらフィールドワークを企画している。地域の皆様には、大変お世話になっている。各学年毎にそれぞれ行き先が異なるため、甲子園会館の前に、多数のバスが並ぶことも珍しくない(写真11)。学生たちは現地でも様々なレポートやスケッチをして、帰校と同時に提出する。入学時には、フィールドワークのためのヘルメットを学生に購入してもらう。

■1年生から「美」の専門教育

ウィトルウィウスによって提唱された建築の三大要素は「強・用・美」。私はこれらの関係は、下から順に積み上げた三段積みのブロックのようなものだと考えている(図1)。すなわち「強」がなければ「用」はない。「強」と「用」がなければ「美」がない。しかし「美」がなければ建築ではない。

一方「真・善・美」という周知の価値体系がある。建築の「強」と「用」はこの「真」に相当する。「強」と「用」は、概念操作に

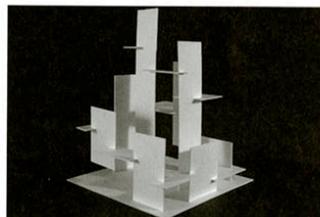


写真12 平面による構成



写真13 陶芸



写真14 いけばな

によって構築される、認識あるいは理性的働きによって求められ、近代以降、科学や技術として急速に進歩してきた。科学は現在の事象を法則化し、法則は未来の事象を予測する。法則は常に進化し、古い法則はその都度無用のものとなる（ちなみに地球環境や原発のことを考えると、できれば「強」の下に「善」を加えたいものである）。

「強・用・美」にも「真・善・美」にも登場する「美」は、ユングによると無意識の中にあり心の中心である「自己」の象徴的自己実現によって具体化される。美は個人の内面の表現である。普段の行為に内面が強く表現されれば、そこから「美」が生まれる。「話す」は「歌」に、「歩く」は「踊り」になるように、建築の「強」「用」は「美」になる。

科学は法則化を繰り返し、法則は没個性的で普遍的な存在になる。これに対して「美」は個性的なほど普遍的となる。独自の風土や文化をもつ都市ほど国際的な都市である。人や都市や芸術は個性的であるほど国際的、すなわち普遍的である。「美」は自己に深く関

わり、個性的な自己ほどより美しく普遍的である。だから美しい芸術作品は時間がたっても古くはならない。それぞれの時代の天才たちが競演する歴史都市が世界の人々の故郷であるのはこのためである。工学の諸学は建築学を除いて自らの歴史を考える学問分野をその中に持たない。建築学にだけ自らの歴史を問う建築史学があり、歴史的建造物や歴史都市は多くの人々の心を癒す。それは建築が自らの「美」を問う学問だからだ。日本の都市を見ていると、「美」の教育の底上げが急務であると強く感じる。

本学では入学直後から早速、専門教育である「空間表現演習」が始まる。そこでは様々な専門家から直接手ほどきを受けながら「美」を表現する力を養う。立体作品（例えば写真12）の他、木工、陶芸（写真13）、いけばな（写真14）、モザイク画、フレスコ画、瓦の制作（写真15～17）等、多様なテーマに挑戦する。瓦の制作では、タタラ盛りという京都の伝統的な手法で、甲子園会館の瓦の復元に挑戦する。1. タタラ盛り、2. 分決め、

3. 荒地取り、4. 裏押し、5. 荒地切り、6. 施釉、7. 焼成の各工程からなる瓦の制作から、最後の甲子園会館の屋根瓦の葺替に至るまで一連の流れを経験し、保存修復の現場を、身をもって体験する。2009年には、当時の皇太子殿下（現 天皇陛下）が瓦の制作実習を御視察になられた（写真18）。

■修士課程の実務教育

大学院建築学専攻修士課程には現在、約7割の学生が進学する。プロフェッショナルスクール形式の建築家教育で、高度専門職能人を育成する。修士要件は、通常の2倍の62単位。研究中心ではなく、学年全員が共通の課題に取り組む、演習中心の実践的なスタジオ教育のカリキュラムである。一級建築士の登録要件である「実務経験2年」を、全学生が修了と同時に充足する。

特にインターンシップ科目では、学内に一級建築士事務所「武庫川女子大学建築・都市デザインスタジオ」を設け、ここを拠点として、学内外の実際のプロジェクトに学生たち

が参画し、実務訓練を行う。例えば阪神電車の鳴尾・武庫川女子大前駅（写真19）、エネマナハウス2017の提案「キセカエハウス」（優秀賞・ライフデザイン賞を受賞、写真20）、朝日エディック株式会社の大阪工場庭園（写真21）、そして現在建設中の本学景観建築学科の新校舎（東棟と西棟、写真22と23）等は、最近の成果である（ちなみに東棟の外壁タイルのうちの150角の装飾タイル1万枚は、フィールドワークにて学科・専攻の全学生が手作りして制作中である）。

このような修士課程の実践的教育を通して、これまで多くの修士生が、例えば組織設計事務所やゼネコン設計部等に就職し、活躍している。2019年度修士生も全員が建築技術者として就職している。また一級建築士の合格者数もここ5年で4回、女子大でトップであり、少人数制で且つ2006年開設であることを考えると、合格率は非常に高い。修士生たちの益々の活躍を期待する。

■国際交流

2008年12月にトルコ・パフチェシル大学と一般交流協定を結び、交流を深めている。

毎年約40日間、パフチェシル大学建築デザイン学部を本学2～4年生の各スタジオに受け入れ、本学の学生と共に設計演習に取り組む国際建築ワークショップInter Cultural Studies of Architecture (ICSA) in Japanを開催している（写真24）。設計演習と

同時に、「いけばな」など学部1年生の演習に参加したり、伊根や厳島神社などのフィールドワークに参加したりして、日本の建築や都市に対する理解を深めている。

さらに毎年約半月間、大学院建築学専攻修士課程の学生約15～25名がパフチェシル大学を訪れ、保存修復関連の実務実習を行うICSA in Istanbulを開催している。修士課程の科目に「トルコ語」を設けており、ICSA in Istanbulに参加する学生は事前に履修する。オスマン帝国時代の宮殿の保存修復（写真25）という国家プロジェクトを手掛ける国立の工房群、モスクなどを鮮やかに彩るイズニックタイルの制作工房、イスタンブール市の保存修復組織KUDEBの工房、さらにイスタンブール以前の古い首都ブルサやエディルネ等を訪問し、トルコの建築文化を学んでいる。

またシルクロードの東端と西端に位置する両大学が交互に主催者となり、国際会議「シルクロードを通して見た建築と文化」を開催している。これまでトルコで2回、日本で2回開催し、2019年にはモンゴルの首都ウランバートルの大学で開催した。本学の教員や学生も参加して国際交流の経験を積んでいる。

このような交流がベースとなり、2019年6月27日に、G20大阪サミットに出席するため来日したトルコのエルドアン大統領が甲子園会館を訪れ、本学から名誉博士の称号が贈呈された。記念講演の中でエルドアン大統領は、日本を見本にトルコでも女子大を作りたいと述べ、現在準備中である（写真26）。

■景観建築学科の新設

本学では、2020年4月より、日本初の景観建築学科がスタートする。それに伴い、建築学科（定員を45名に増員）と景観建築学科（定員40名）をあわせて、女子大初の建築学部が誕生する。同時に大学院も整備し、日本初の大学院建築学研究科（建築学専攻と景観建築学専攻）も誕生する。

例えばハーバード大学のGSDには、建築学専攻、ランドスケープアーキテクチャ専攻、都市計画及びデザイン専攻がある。景観建築学科・専攻は、スタジオ教育など基本的にこれまで述べてきた建築学科・専攻の特徴を引き継ぎながらも、建築のみならず、同時にアーバンデザインやランドスケープデザインもできる人材を育成する（写真27）。特に設計演習では「住宅と庭」「宿泊施設と渓流」「集落と池」などの課題を通して、建築と屋外空間を一体的に設計できる能力を養い、ひいては「住居地域と流域の防災」などの課題を通して、都市レベルや地球環境レベルの視野を持った設計者を育てる。その演習時間は、ランドスケープ系の学科としては日本で唯一、欧米並みの時間数を確保している。またCGやドローン、GIS等による景観映像情報技術にも力を入れる。水理学や土質力学なども学ぶ。全学生が、一級建築士と登録ランドスケープアーキテクトの両資格の取得を目指す。

我が祖先は庭を愛し、また箱庭や盆景や盆栽を作りながら自然と共生した。その伝統を踏まえ、専用の園芸実習場にて、学生一人ひとりが実際に植物を育て、植物に関する生きた知識も体得する。

■総合芸術としての建築

建築は、理系だけに過ぎるものではなく、文系だけでなく、芸術系だけでもなく、実践を通してそれらを総合したものであり、そのことが武庫川女子大学の建築教育の基本にある。はたして建築学科・専攻と景観建築学科・専攻の、学部・研究科としての総合効果は如何ばかりか。我々の新たな挑戦は今始まったばかりである。

（おかざき しげゆき）



写真15 瓦の制作 タタラ盛り



写真18 皇太子殿下（現天皇陛下）御視察の様子



写真16 瓦の制作 下地を乾燥させる



写真19 阪神電車 鳴尾・武庫川女子大前駅



写真17 制作した瓦を使って屋根の葺替を行う



写真20 エネマナハウス2017の提案「キセカエハウス」



写真21 朝日エディック株式会社の大阪工場庭園

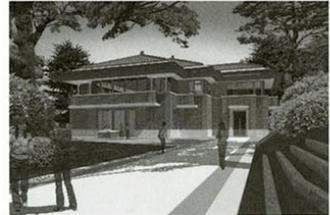


写真22 武庫川女子大学景観建築学科・東棟パース



写真23 武庫川女子大学景観建築学科・西棟パース



写真24 トルコの学生の講習会の様子



写真25 ドルマパフチェ宮殿の修復現場の見学



写真26 トルコ・エルドアン大統領との記念撮影



写真27 自然豊かな甲子園会館は景観建築学科・専攻にとっても絶好の教科書